赤羽別院報 第29号
発行所
真宗大谷派
赤羽別院 親宣寺
発行人
輪番 浅野 怜
〒444-0427
愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
Tel・Fax（0563）72－2308

# 小悲の悲しみ

## 念仏すべき身

教えを聞くということは、教えを聞いてそれを了解し、そして、身につけていく、このように私達の学習はなっておりますが、真宗の教えを聞くということは、解ったとか解らないとか、喜べるとか喜べないとかいうことを超えて教えを聞くということがすでに大事なお育ての中にあるのだということが一番大事なのです。

お経の中で、ここのところは何が書いてあるのかと一生懸命勉強するのですが、仏さまの言葉としてなかなか戴けません。つまり仏さまに遇えないのです。

そういう中で、私は北陸の加賀門徒の方々にお遇いしたのです。大雪でも命がけで法話を聞きにこられる。耳が聞こえなくなっても法座に身を置いておられる。その姿に私は非常に感銘を受けました。

教えを聞かねばならない身を生きておられるのです。

教えを聞くという身が定まっているのです。とても力強い生き方です。

自分の力で聞いているのではない、お育てにあずかっている、お育ての中に御縁を戴いていると。

その北陸で、次のような詩を教わりました。

**何を聞いたか解らねど**
**胸に残る　六字の名号**

念仏すべき身であることにもう一度頷きなおす、これが聴聞をしたという証拠だと言われます。

我が身が念仏・教えを聞かねばならない身を生きているのです。

多くの方が亡くなられた東日本大震災以降、人間が救われるということはどういうことなのか、私たちは救いを求めていながら本当の救いというものが解らない。そのような時、自分自身に呼びかけてくる本願に頷く、そういう一つの歩み、それがお育てにあずかる真宗門徒のあり方であろうと思います。

## 空しさ

日常の忙しさの中に人生が埋没してしまうと、生きていること自体が空しく感じたりします。そして、一旦その空しさが起ると何をもっても埋められない。そういう問題が宗教心というものです。

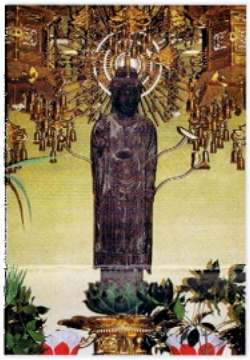
何か本当のものに触れたい、何か本当に頷き得るものに遇いたい、それが空しさという形で私たちに興ってきます。ですから、宗教というのは人間が自分に都合のよいように救われようとして利用するものではありません。

本来、宗教とは人間に答を与えるものではなく、その利用価値を問うようなものでもありません。

そうではなく、真実の宗教というのは人間を問うのです。人間の方が問われるのです。

死すべき命を生きている。その生き方でいいのかと一生懸命やっているけど空しくないか、寂しくないかと。本当は一人ぼっちで孤独をかかえて生きているのです。

こういうものは、どんな心の工夫を持ってきてもごまかすことのできない人間の存在の有様です。これを定業（じょうごう）といいます。絶対に逃れることができないものです。病むこと、老いること、死もまた逃れられない、そして愛別離苦も避けることのできない、それが私たちの身の有様です。



## 愛別離苦

愛別離苦には二つあります。一つは死別であり、愛する者を置いて独りゆくこと、また、どうしても死んでほしくない人に先立たれてしまうということです。二つには愛する者と別離しているという悲しみです。愛していながら本当に通じ合うことができないという悲しみです。これが孤独の悲しみです。

自ら命を断った子供の遺書には、みんな「お母さん、ごめんなさい」と謝っています。愛されていることを知っているからです。お母さんに言っても、ただ苦しめるだけ、だから黙って心におさめて一人死に行くのです。お母さんの方は、愛して、愛して育ててきたのに、互いに心を通わすことができず、子どもの苦しみを解ってあげられなかった。一人で逝かせてしまった。これが悲しいのです。

日頃は解っているつもりでも、いざという時に話してみるとなかなか解ってもらえない。この時解ってもらえなくても、辛さだけでも受けとめてもらえたら生きていけます。

これが悲しみが悲しみを救うということです。如来は人間を喜ばせて救うのではなく、大悲をもって、悲しみをもって人間を救うと言っています。

私たちは悲しみを通し、その悲しみの底に届いていた深い大悲の声「南無阿弥陀仏」に触れるのです。人間の悲しみは大いなる悲しみに触れて初めて解けるのです。

## 小悲

親鸞聖人は、人間の悲しみの姿を非常に深く見つめておられます。悲しみには小悲、中悲、大悲の三つがあります。

私たちの悲は衆生縁の小悲です。これは人間関係の間でおこる慈悲心です。小と言っても悲しみが少ないのではなく、激しいのですがその悲しみが自分の都合にかぎられているのです。非常に個人的で、自分の身内や自分に関係するものにおいて悲しむことしかできないのです。

もう一つの小悲は、その悲しみが続かないということがあり、もっというと、悲しみ切れないということです。

戦争にしても、この震災のことですら悲しみが忘れられていくということがあります。そしてまた、そこに争いが起きるのです。本当に悲しみ切れない、それが人間の小悲の姿であります。

さらに、小悲はその悲しみを起してきたものに対して怒りを持つということがあります。ニューヨークで起きた同時多発テロ、池田小事件でも解るように、やられたら報復をすることによって悲しみを癒そうとする。どの親も犯人を早く死刑にしてくれという。それが人間の避けられない感情なのでしょう。しかし、刑が執行されても「何も解決していない」と言われた遺族の言葉が印象的です。人間の小悲というものはこのような限界を持っています。本当に悲しみ切るとはどういうことでしょう。

## 無慚無愧

親鸞聖人が一番悲しまれたのは「まことの信心」が得られないということです。どれだけ学んでみても、どれだけ聴聞してみても清らかな信心を得ることができない。確かめてみると、また迷いの中に、自分を見いだすのみです。それ程人間の迷いが深いのです。

更に、そのことに涙して悲しむ心もないのが私だといわれる。無慚無愧だと。悲しむべきことを本当に悲しみ切ることもできないこの身であるといわれています。しかし、そのようなもののためにこそ建てられた本願であったのだと。そこでもう一度深く念仏申す身に帰っておられます。

私たちは、みな悲しみの存在です。念仏申すべき身に生まれているのです。

二〇一一年八月二九日
第12組夏季真宗講座
佐野明弘師講話要旨

■講師プロフィール

**佐野 明弘師**（さの あきひろ）

1958年（昭和33年）静岡県に生まれる。
石川県加賀市　光闡坊（蓮如上人御旧跡）住持
はじめ禅宗で修業するも22才で得度して真宗大谷派僧侶となる。
同朋会館教導
子供たちを放射線から守る防災ネット事務局

## 別院行事のご案内

**除夜の鐘（初鐘）**
12月31日（土）午後11時45分より
先着順にどなたでも鐘撞きできます。

**修正会**（しゅしょうえ）
1月1日（日）午前7時
法話　赤羽別院　輪番　浅野　怜師

**双全講**（そうぜんこう）
1月15日（日）午前10時・午後1時
法話　第9組　良興寺　三浦　真教師

**真宗講座**（しんしゅうこうざ）
テーマ「正信偈に学ぶ」
第1回　1月24日（火）午後2時
第2回　2月28日（火）午後2時
第3回　3月27日（火）午後2時
講師　九州大谷短期大学前学長　古田　和弘師

**法式研修会（第2回）**（ほうしきけんしゅうかい）
2月中　詳細未定

**春季彼岸会**（しゅんきひがんえ）
3月20日（火）午後1時
法話　第13組　安休寺　雲英　真人師
3月21日（水）午後1時
法話　第8組　福正寺　本多　友明師
3月22日（木）午後1時
法話　第14組　蓮成寺　青木　馨師

**帰敬式**（ききょうしき）
4月11日（水）午前
詳細未定
報徳会のお勤めと併せて行います。
次号で詳しくお知らせ致します。

**晨朝法話**（じんじょうほうわ）午前7時
1月13日（金）第12組　徳行寺　山下　正敏師
1月28日（土）第12組　徳行寺　山下　正敏師
2月13日（月）第13組　長壽寺　和田　純悟師
2月28日（火）第13組　本浄寺　津田　賢順師
3月13日（火）第14組　本傳寺　本多　園昭師
3月28日（水）第14組　安專寺　安藤　智彦師

# 謹賀新年　年頭のご挨拶

赤羽別院輪番　浅野　怜

慈光のもと、崇敬区域のご寺院並びにご門徒の皆さまにおかれましては、清らかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は、赤羽別院親宣寺並びに地域教化センターの護持・運営にあたり、一方ならずお世話になりましたことを、年頭にあたり厚く御礼申し上げます。

私儀、昨年九月十日を以って赤羽別院輪番任期を大過なく了えることができました。ひとえに皆さま方のお力添えの賜と厚く御礼申し上げます。一昨年十月、七十四年ぶりに御門首夫妻をお迎えしての「宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要」親修が強く印象に残るところであります。

はからずも、この先二年間の輪番重任辞令を拝命致したところであり、身の引き締まる思いであります。微力ではありますが、赤羽別院の一層の繁栄を期して精一杯努めて参る所存です。皆さま方の更なるご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、岡崎教区ではかねてより懸案でありました「中央教化センター」が四月一日より発足する運びとなり、三河・豊橋・静岡別院にもそれぞれ「地域教化センター」が設立されることとなりました。

赤羽別院が教区のモデル別院の指定を受けて取り組んできたように、崇敬区域に密着した共同教化の拠点となって、これまで以上に教化活動を充実し、別院に留まることなく各々の寺院の活性化をも図ることを目的とするものです。

即ち、新しい別院の構築を目指す体制の確立であります。

それぞれの別院には、地域独得の問題を抱えておりますが、その地域特性を生かした地域教化センターとして発展することが望まれるところであります。

赤羽地域教化センターは、創立以来第二期を迎え、第一期三年の実績のうえに立脚し、更なる飛躍を期してスタッフ一同全力で努めて参ります。皆さま方の特段のご支援を賜りますようお願いし、新春の挨拶とさせていただきます。

## 浅野怜師・輪番を重任

安原宗務総長より辞令交付

去る9月10日付で1期4年の任期が満了した赤羽別院輪番・浅野怜師は、その任を重任する本山人事が発令され、辞令が交付されました。

師は、これまで本山の諮問機関である宗務審議会「別院に関する委員会」委員及び本山組織部長の諮問機関である「別院問題研究会」会員として活動中であり、この両職についても引続いて担当するところとなりました。

なお、輪番職の重任任期は2年であり、平成25年9月10日が任期となります。

# 秋季彼岸会・報恩講厳修

## 報恩講

小谷師の法話

去る10月14～16日の3日間、赤羽別院において報恩講が厳修されました。

崇敬区域の門徒・寺院をはじめ、三河・豊橋・静岡別院の各地からも広くご参詣を賜り、お念仏の声高らかに法要が勤まりました。

法話には、小谷香示師・楠理見師・安藤伝融師をお迎えしたなかで連日一貫して「講」という言葉が取り上げられていました。

報恩講に代表される「講」は、蓮如上人よりの伝統であり、自らをさまざまなかかわりの中で確かめ合うものであります。

「荘厳とは、あるべくしてそこにあることを言う」これは、かつて先輩から頂いた言葉ですが、荘厳は単にお内仏・仏具・供華などのおかざりだけでなく、参勤をする僧侶・法話をする人・参拝し聴聞する人、また、その人々をお迎え下さる裏方さん等大勢の有縁の方々に支えられて報恩講は勤まるのです。

特に、平成23年の報恩講は、親鸞聖人七五〇回の御正当報恩講であり、事前の助音の練習にも力が入り、実りあるものとなりました。

毎年お迎えする報恩講ではありますが、終ったらそれで済みではありません。

「終りは始まり」という言葉があります。私たちは、あたりまえでない毎日を、あたりまえに過しています。その日常生活のなかで困難に直面しないと、問いや課題さえ起きないのが実情であります。

この一年、何に迷い、何に出遇おうとしているのかこの身をあげて問うていきたいものです。

（稲垣記）

勤行のようす

## 秋季彼岸会

前列に子供助音の皆さん

厳しい残暑を吹き飛ばす如き台風一過、堂内を心地よい秋風が吹き抜けるなか、9月22～24日の3日間にわたり、秋季彼岸会・永代経法要が厳修されました。

この法会には、今回、子供たちが助音として初めてお勤めに参加したことが特筆されます。

8月に行った別院での助音練習会をはじめ、崇敬区寺院での行事で練習した子供さん13名が、大人と一緒になって正信偈・同朋奉讃ほかをお勤めしました。

読経の後の法話では、初日に第8組宿縁寺・織田慶雄師が、身近かな日々の暮らしの中での出来事を仏法に照らし、中日には第12組の了願寺・藤谷信雄師により、経典の言葉を分かりやすく、引き受けやすく、また、3日目には第12組本誓寺・足利憲師がご自身の体験を基に人の生き方をそれぞれお説きになりました。

小さい子供から老人まで、幅広い世代の人々が声を一つにして厳修した法要は、法義相続を言葉ではなく、肌で感じることが出来た貴重な法会となりました。

この子供さん達の中から染香人が生まれることを切に願うものであります。

（本多記）

# 早期復興　がんばろう日本！

## 法式研修会を実施

昨年10月3日、儀式部主催による法式研修会が実施された。

若年層を中心にした住職・寺族を対象とするもので20名の参加があった。

今回は、別院や各寺院で執行される行事のなかで、最も大切な行事とされる「報恩講」の諱修にあたっての声明・作法の習得に重点を置くもので、勤行の心得から、各種の所作・作法にはじまり、調声の心得等々の説明が行われ、この後に活発な質疑応答が行われた。

最後に、本番を想定した模擬法要があり、調声では一人一人が順番に大きな声を発し練習した。

研修のようす

真宗では、各種の作法が決められているが、それぞれが我流で行っていることが正され、大変有意義な研修会となった。

（田村記）

## 帰敬式を受式しませんか！

門徒―父が亡くなりましたので葬儀をお願いします。戒名も…。

住職―……。

真宗では戒名でなく「法名」といい、本来は亡くなってからつけるものではありません。

帰敬式（おかみそり）は、生前に「釈」を姓とする法名をいただき、お釈迦様の弟子となり、仏の教えに生きる生活をはじめる儀式です。

別院では左記により帰敬式を行います。あなたも受式しませんか。

記

一、期　日　平成24年4月11日
一、場　所　赤羽別院　お御堂
一、冥加金　二万円

詳細については次号（4月1日付30号）でお知らせ致します。

# 第14組西光寺　音楽法要・報恩講

去る11月15日から3日間厳修された第14組・西光寺の報恩講では、その一環として音楽法要が営まれた。

和讃に曲を付けた作曲家平田聖子師をお迎えし、石川ゆかりさんの伴奏・住職清澤菩師の指揮により、親讃会23名による合唱と都築美穂さんの独唱の歌声が堂内に響きわたり、昨年5月の親鸞聖人七五〇回御遠忌の岡崎教区讃仰事業で、本山の御真影の前で歌った、声明と合唱のコラボの盛りあがりの再現となった。

讃仰曲「慶ばしいかな」他10曲を見事に唄いあげ互いに笑みを交しご納得の様子であった。

この後、平田師の歌唱指導と歌を交えた法話があり、とても充実した音楽法要であった。

3日勤めの報恩講の初日には本宗寺住職・堀田護師、二日目には宿縁寺住職・織田慶雄師、三日目には守網寺住職・渡邉晃純師の法話を戴いた。

また、この間には当山住職・清澤菩師による御伝鈔拝読や登高座が行われ、御荘厳とお香のかおりの中で参拝者は一同に御満足のようすであった。

（石川記）

親讃会の皆さんによる合唱

# 佐野明弘師をお招きし　真宗講座開催

第12組　教化委員会

去る8月29日、蝉時雨のなか、第12組の夏季真宗講座が、細池・浄徳寺において開催された。

講題「東日本大震災に思う」は、今、このことを話さねばいつ話すのかという、時宜を得た重たいテーマであった。

津波によって流されて亡くなった人が哀れで気の毒で、残された者はそうではないのかというと、残された者もまた悲しみを背負って生きていく身であると話され、本当に私たちが救われるとはどういうことなのかを「悲（ひなしみ）」という言葉をもってとてもわかり易く語られた。

福島原子力発電所の放射能問題については、今、一番心配しているのは子供たちのことであり「日本中の子供たちが大変危険な状態の中にいる」ことが知らされた。

それは「食品汚染であり25年前に起ったチェルノブイリの原子力発電所の爆発事故による、小児ガンの発生からも明確なこと」と話された。

このことから、知識と情報収集の大切さを知らされるとともに、これらの経験が生かされなければならないと痛感した。

※講話の要旨一面に記載

（浅野眞記）

熱心に聴聞

# 第30回 暁天講座開催

第11組教化委員会

第11組教化委員会では、親鸞聖人七五〇回御遠忌の基本理念「宗祖としての親鸞聖人に遇う」のもと、真宗門徒として改めて宗祖の語りかけを聞き、歩みを深めようとの願いから「私が出遇った親鸞」をテーマに8月17日より25日まで、組内寺院9ヶ寺を会場にして開催されました。

平坂・無量壽寺会場では伊奈祐諦師が、「善悪を分かったつもりで決めつけ、その善悪に苦しんでいたものが、日常の分別を超え、定まらなくなったところに弥陀の本願が聞こえてくる」と悪人正機について説かれました。

他会場でも、各講師が自身の出遇われた親鸞聖人のお言葉を講題に、難解な文章も解りやすく、時に笑いを交えてお話し下さり、人智の過信が問われる今、苦しみ悲しみを引き受けて歩まれた親鸞聖人のお念仏の道をいただく講座となりました。

（平野記）

無量壽寺会場での聴聞者

# 大人と子供の正信偈練習会

第12組・願海寺

市子町の願海寺では、地域子供会と協力し、大人も加わる「正信偈練習会」が初めて開催された。

8月22日から26日までの5日間、早朝のラジオ体操の後、子供・大人の有志が願海寺の本堂に集まり、一緒になって正信偈の練習をするもので、取材の25日には40名程の参加があった。

子供たちは、きちっと正座をして大きな声で馴れない正信偈の練習に励んでいた。なかでも、同寺の若坊守の隣に座り、御本尊の真ん前で調声を努める子供の姿がとても印象的であった。

子供が、家族とではなく一般の大人と同席で練習に励むこの取組みは例を見ず、とても意義深い取組みであった。

（石川記）

子供と大人が一緒に

# 第3回 投稿俳句・川柳会

新たに川柳が加わったくらし部主催の第3回投稿俳句・川柳の会には、俳句の部48名105首・川柳の部12名22首のご応募をいただきました。

応募作品は全てお御堂内に掲示し、このなかから最優秀作品各5首の詠み人10名をお招きし、報恩講の営まれた10月15日に賞状に記念品を添えて顕彰されました。

選者　鈴木いはほ　三浦　貞子

**俳句の部**（順不同）

秋澄むや　御坊朝事の　鐘響く　東脇　妙子
聞法に　雨の音きく　秋彼岸　蓮沼たけし
木槿咲く　雨の一日に　法を聴く　中根佐代子
黙禱の　静寂畏し　原爆忌　高須　南帆
今朝の秋　まず合掌し　鐘を撞く　加藤あさみ

**川柳の部**（順不同）

震災を　忘れないぞと　鯰飼う　山田　裕美
鐘の音に　急かされて向う　弥陀の苑　三矢　市平
辛抱を　溜めず流せる　お念仏　中根佐代子
慰霊碑に　佇ちて平和の　礼を告ぐ　鈴木　浅夫
敗戦忌　千人針は　死語となり　鎌田　晴枝

# 心の元気塾

第14組　教化委員会

平成七年に本山指定推進員養成講座として発足した第14組「心の元気塾」では、今回は講師に大賀光範師をお迎えして開催した。例年のように、土曜日の夜三回にわたって開く座談を中心とした講座である。

今年度のテーマは「このままでいいのか、この私」で、少しでも本当の自分、輝く自分を見つけることを願ってのものである。

20代の独身女性から60代男性までの各界各層から40名の参加があり、毎回、大賀師の講話を聴聞した後、参加者が一班10名の4班に分れて、座談会形式の話し合いが熱心に行われ、各班ともその内容はとても充実したものであった。

毎回座談会の後に行われた「感話」では「同班の方が話された一言で、最近の自分の心のもやもやが解消した」、また「自分のこれまでの人生観をこわすことができたら、もっと楽に生きられるかな」などと話される表情には明るく輝くものを見ることができた。

この講座は、門徒と組の青壮年部で組織・運営されており、三年毎に真宗本廟への上山奉仕も実施している。

また、本年の2月には「門徒によるリレー感話会」の開催が予定されている。

（浅野眞記）

車座になって座談会

# 秋の幡豆・友引市

第9組祐正寺

厳しい残暑が続く9月10日、第9組祐正寺にて秋の幡豆・友引市が開催された。

今回で10回目となるこの行事は「乗って残そう名鉄蒲郡線」と銘うって、同線の利用促進を目的として、祐正寺前坊守・中村郁子さんが主宰するNPO法人幡豆・三河湾ねっとが年2回開催している。

西幡豆駅に隣接する祐正寺の境内には、特産物・民芸品や骨董品等様々な品を扱うマーケットが並んだ他、子供達や民舞会の皆さんによる踊りが披露された。

この日のマーケットは、県内各地から30店舗が集まり、炎天下にもかかわらず多くの人々が会場を訪れ賑わいをみせていた。この様子を目にしながら、中村さんは「幅広い年代の方々がお寺に足を運ぶきっかけになれば嬉しい」と語られた。

（櫻部記）

友引市のようす

法衣／袈裟／打敷／念珠／幕／記念品

合資会社 縫源法衣店

真宗大谷派 法衣・御稚児貸衣装

〒460-0015　名古屋市中区大井町1-39
TEL（052）321-4965
FAX（052）323-9559

こころをカタチに残したい
永遠の絆づくりのお手伝い。

仙台屋仏檀堂

仏檀・仏具・墓石

刈谷本店　(0566)24-7841
阿久比店　(0569)48-3733
半田店　(0569)24-8550
東海店　(052)689-7311
家具調仏檀 想　(052)709-2051
URL　http://www.sendaiya.co.jp

■■■カルチャーウォーク・その10■■■

# 近代建築の伽藍を仰ぐ
# 岡崎市 佐々木 上宮寺を訪ねる

**三河随一と謳われた大伽藍から、近代モダン建築に生れ変った太子山・上宮寺は「太子」という名の示すとおり聖徳太子を開基とする三河三ヶ寺の一つである。**

**蓮如上人を支えた数多くの如光伝説や明治期には清澤満之の門下生であった佐々木月樵を生むなど、三河の真宗を代表する寺院として今日に至っている。**

**穏やかな秋晴れの日、佐々木宣祐副住職と坊守から貴重なお話を伺い、広い境内を案内していただいた。**

聖徳太子が推古天皇六年（五九八）仏法興隆のために全国を巡行された折、太子の願いによって上宮寺は開山され、他宗から浄土真宗に帰したのは、23代蓮行が親鸞聖人に出遇った貞永元年（一二三二）のことである。

上宮寺を訪ねて先ず目にする山門や本堂は、凡そ日本の寺院を感じさせないものであるといえる（写真参照）。

かつて本堂が十四間半四面を誇った上宮寺は、昭和六十三年の夏火災により鐘楼を残して建物の全てを焼失した。

平成八年（一九九六）、門信徒をはじめ有縁の方々の懇念により、仏教発祥の地インドの仏舎利殿を参考に設計し、再建されたもので現代アートの集大成の趣きがある。

上宮精舎（本堂）

上宮寺を語るに欠かせないのは、30代住職として蓮如上人に仕えた如光である。如光はその発祥を油ヶ淵（碧南市西端）より出現した龍の化身とされるなど、謎に包まれた部分が多い人物ではあるが、多岐に亘りその才能を発揮して蓮如上人と共に浄土真宗の中興に努め、三河で初めて上人から十字名号「帰命尽十方無碍光如来」が下付された。

上人の信頼の証ともいえる「蓮如・如光連坐像」が残されており、この時代には三河を中心に尾張・美濃・伊勢に一〇五の末寺・道場があった。

戦国時代には、周囲を池や川の自然に囲まれた平地に、堀と土塁を巡らし「守護不入特権」が認められていたが、家康の家臣が上宮寺に押し入り強引に兵糧を徴収したことから三河一向一揆は始った。

3年に及ぶ長い戦の末に寺方が敗れ、一揆の中心であった上宮寺は破却され、三河では真宗は禁教となった。時の第34代勝祐は、石山本願寺が織田方と争った全国規模の一揆でも、三重・長島に参戦したがここでも敗戦し、息子信祐と共に切腹して果てた。

正に、鎧の上に袈裟を着た僧であり、寺の復興が許されたのは約20年後のことである。

また、48代月樵は多くの盟友と共に維新後の新しい時代の仏教学を築き上げ、大谷大学第3代学長として後進の育成指導に尽力した。

（間島記）

# 御影道中協力会来院

本願寺中興の祖・蓮如上人の御影が、本廟と上人縁の吉崎御坊の間を、全国各地の僧侶や門徒の手により下向・上洛する御影道中が、毎年4月から5月にかけて催される。

この行事に携わってみえる方々の有志で組織する、御影道中協力会の橋本会長始め有志16名の方々が、去る9月16日当別院に御来院された。

ご一行は、蓮如上人に縁のある「三河地区の真宗の旧跡を訪ねる集い」の行程の中で、当別院にお立寄りになった次第でしたが、皆さまから当別院の威容を誇る見事な山門に驚嘆と讃美の声があがった。

お御堂内で、浅野輪番より赤羽別院の沿革や赤羽地域教化センターを中心とした教化活動の概況、停滞する真宗の由緒別院である吉崎・岡崎（京都）・山科の三別院の活性化等に関する説明があった。

この後、ご一行は西方寺・清澤満之記念館、応仁寺、蓮成寺のお詣り・拝観・法話聴聞に向けて当別院を後にされた。

（平野記）

御来院の皆さん

# 岡崎教区教化団 布教大会

お彼岸も過ぎ、涼しい風が吹き始めた9月30日、岡崎教区教化団主催の布教大会が、第8組宿縁寺において執り行われました。

当日は多くの参詣者が本堂に集い、岡崎教区内の布教団員11名から、一人当り20分の持ち時間で第8組安楽寺住職・伊奈祐諦師を皮切りに次々とお話を戴きました。

なかには、笑い声が溢れる法話があるかと思えば、水を打ったように静まり返る堂内に講師の声が響きわたる光景も見られました。

休憩や昼食時には参詣者同志の会話もはずみ、布教大会は滞りなく執行されました。

元来、布教大会は、日頃から布教伝導（説教）に篤い志を持つ僧侶の研修の場でありますが、聴聞者にとっても、一つの場所で大勢の僧侶の法話に触れることができる数少ない機会であります。

全てにスピードを求められる現代を生きる人々にとって、この布教大会は見逃すことのできない法会といえます。

（本多記）

伊奈師の法話

## 門徒の声

# 寺院の守護

核家族化が進み高齢化社会になってきた現代では、若者の考えが老人には理解しがたいものとなりつつある。

私たちがこの世に生を受けた尊さや有難さを無視し、自分本位の考えだけで生きられると思っているようだ。

先祖があってこそ、現に今我々がここにいることを忘れてはならない。先祖を敬う気持が湧いてくれば、自ずから仏壇の御本尊の前で念仏を称える声が出てくると思う。

私は、喜寿を過ぎてから手次寺の世話方総代を勤めさせていただくことになったが、住職が代務者であることや一人暮しの坊守さんが健康に恵まれないため、双方を守護することが大変である。更に、本堂や庫裡の老朽が進む状況にあるが、このようなお寺はこの地方では他にも見受けられ、それぞれのお壇家の皆さんも苦労されていると思う。

しかし、先祖が守ってきたお寺を相続していくことは、私たちの責務であり努力しなければならないと考える。

赤羽別院では、幸いにして赤羽地域教化センターが設立されて三年が経過し、この四月には新体制が確立され、充実した組織で運営されていることは限りない喜びである。

お寺と門徒会の両輪が一体となって、お寺を守護していきたいと思う。

合掌

第8組・順成寺門徒　山口　一良

# 石川嘉弘氏 五環絞入り抹茶茶碗 寄贈

篤い心をもって仏法に帰依し、熱心に岡崎教区門徒会長をお勤めになる石川嘉弘氏より、「五環絞入り抹茶茶碗」が、本山及び赤羽別院他に寄贈されました。

この茶碗は、去る5月に催された「宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌岡崎教区讃仰事業」の茶会に使用するため、氏が本山の許可を得て、瀬戸市在住の、日展入賞34回を数える陶芸家水野教雄氏に依頼して作成されたもので、当別院では、桐箱入り五客を受納しました。

氏は、本山に寄贈された折の様子を「御門首夫妻に直接お渡しできただけでなく、一時間もの長時間歓談いただけた。生涯を通じてこれに優る感激はありません」とお話しになりました。

（石川記）

贈呈式

五環絞入り茶碗

http://www.katch.ne.jp/~akabane_betuin/

仏事で困ったら…

携帯からのアクセスはQRコードから

赤羽地域教化センターウェブ

お寺の法語掲示板をみてみよう

# お詫びと訂正

既報第28号1頁の講話記事中に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げ、次のように訂正いたします。

| 箇所 | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| ・1段22行 | 一二六三 | 一二六二 |
| ・2段28行 | 磯長 | 磯長 |
| ・4段17行 | 往生の業 | 往生之業 |
| ・6段1行 | 者は | は |

## 懇志披露

一・赤羽御坊新聞御懇志（敬称略）

・妙専寺同行一同

・石原美根子

一・物品寄贈（敬称略）

抹茶茶碗（五環絞入り）五客　石川嘉弘

額入写真（W四ッ切り）六枚　石川鴻英

御　貴重なご懇志をありがとうございました

## お寺の掲示板

世間の常識は
真宗の
非常識である
第13組教榮寺

## 編集室

新体制で3回目の赤羽御坊新聞となりますが、チームワークも整い全力で編集に取り組んでいます。今回は趣向を変えてスタッフの紹介をします。

一見頑そうだが実は気の優しい田村部長・口八丁手八丁で才媛の女傑の浅野・何時も不言実行冷静沈着な間島・列座のエースで将来有望な説教師本多・知識欲旺勢な巨漢若年寄の稲垣・深い知識と集中力は校正に不可欠な平野・何でも吸収の行動派は若冠25才の櫻部・有言実行粘り強く行動力抜群この人だけが門徒で編集長の石川の8人です。力を合わせ精一杯頑張ります故、今後とも宜しくお願い致します。